

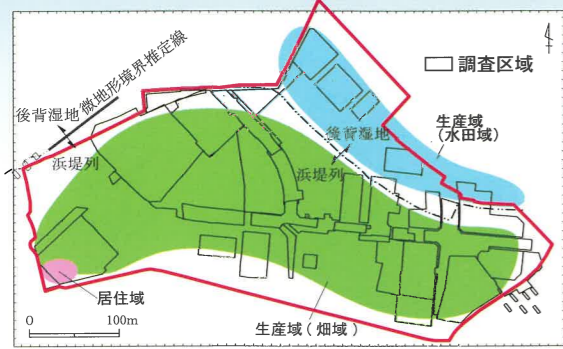
江戸時代

(17世紀～19世紀中頃)

江戸時代になると、集落が形成されます。17世紀には生産域(水田・畑)を主としていましたが、18世紀から19世紀には、居住域が拡大し、屋敷の跡が見つかります。



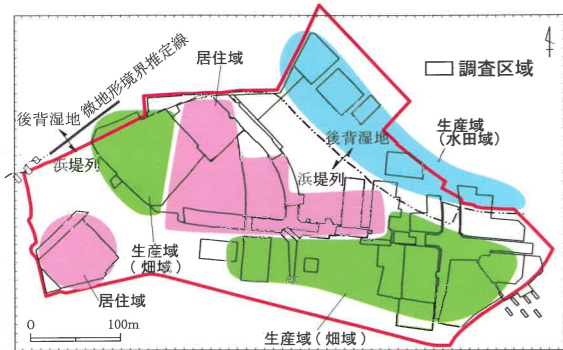
見つかった陶磁器



江戸時代: 17世紀の土地利用



17世紀の畑の跡。まわりに溝を掘って区画し、そのなかを耕しているのがわかります。



江戸時代: 19世紀の土地利用



18世紀～19世紀の建物跡。柱を建てる際に掘った穴が何列も並んでいます。

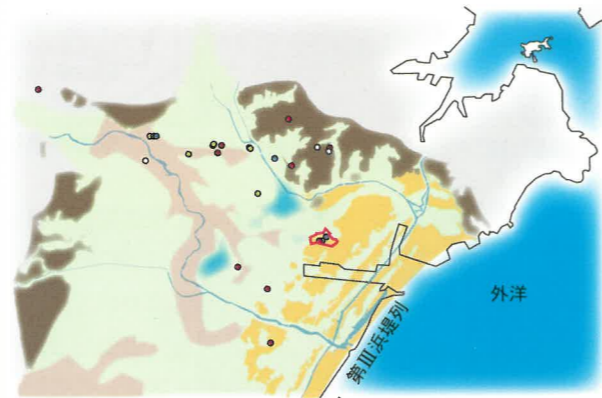


※せんじ 梵字墨書
小型の井戸の底面付近で梵字墨書のある礫が49点見つかりました。多くは、平らな河原石の片面に梵字が一字書かれており、その面を上にして出土しています。



(縮尺 1/2)

※梵字: 古代インドで発達した文字。日本では仏などを表す種子(シンボル)として用いられています。



江戸時代の微地形環境想定図と遺跡分布

17世紀に大代運河、舟入堀の開削で、新たな水運の道が作られ、七北田川の付け替え工事がなされて潟湖は縮小していきます。こうした土木工事によって沼向周辺には可耕地が広がることになり、新田開発が行われるようになります。



区画整理前の沼向遺跡周辺 (平成5・6年当時 高橋親夫氏撮影)

平成3年度から行なわれてきた仙台港背後地の土地区画整理事業で、左の写真のような昔の面影はなくなってしまいました。しかし、平成6年度から始まった沼向遺跡の発掘調査は、この景観を育ててきた過去3500年の土地の変化と人間の営みを明らかにしました。それは、私たちの祖先が、環境に適応しながら、自然に働きかけてきた歴史でした。

編集・発行: 仙台市教育委員会文化財課
TEL / 022-214-8893
協力: 松本秀明・高橋親夫
発行日: 平成22年3月

・さらに詳しく知りたい方は仙台市文化財調査報告書第360集『沼向遺跡第4～34次調査』(平成22年3月刊行)を図書館などでご覧下さい。

ぬまむかい 沼向遺跡

海岸部の複合遺跡 (縄文時代後期～江戸時代)



古墳時代前期の土師器器台出土状況 (住居床面)



縄文時代晩期の土器出土状況 (土壌墓)



沼向遺跡遠景(南西方向から)



古墳時代後期の竪穴住居跡調査風景



江戸時代の舟形木製品出土状況

仙台市教育委員会

沼向遺跡とは

沼向遺跡は、仙台市宮城野区中野字沼向他に所在し、仙台港フェリー埠頭の北側約400mに位置しています。遺跡は、標高0.5～1mの微高地（浜堤列）から低湿地（後背湿地）にかけて立地しています。遺跡の面積は、約12ha（クリネックススタジアム宮城約9個分の広さ）です。沼向遺跡の調査は、仙台港周辺の再開発に伴う土地区画整理事業に先立ち、平成6年度の第1次調査から21年度の第36次調査まで行われました。調査面積は約6.8haです。遺跡の時代幅は、発掘調査によって右の年表に示したように、縄文時代後期の中頃から江戸時代にまで及ぶことがわかりました。

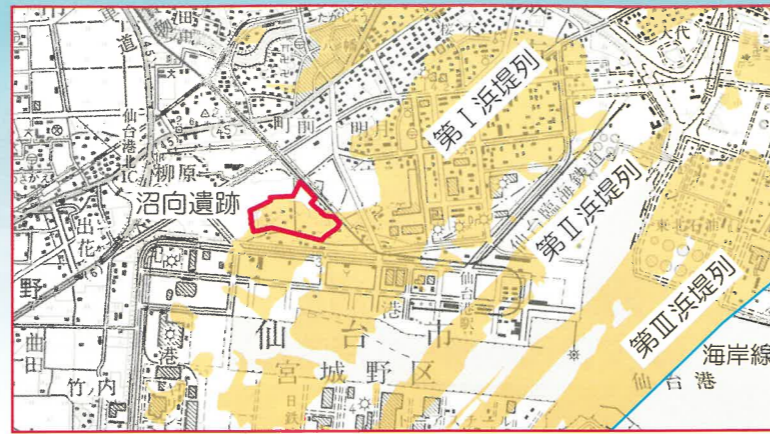
自然地形と集落

沼向遺跡は、主に2つの自然地形に立地しています。

微高地（浜堤列：海岸に沿って波が作った高まり。主に砂・土からなる。）

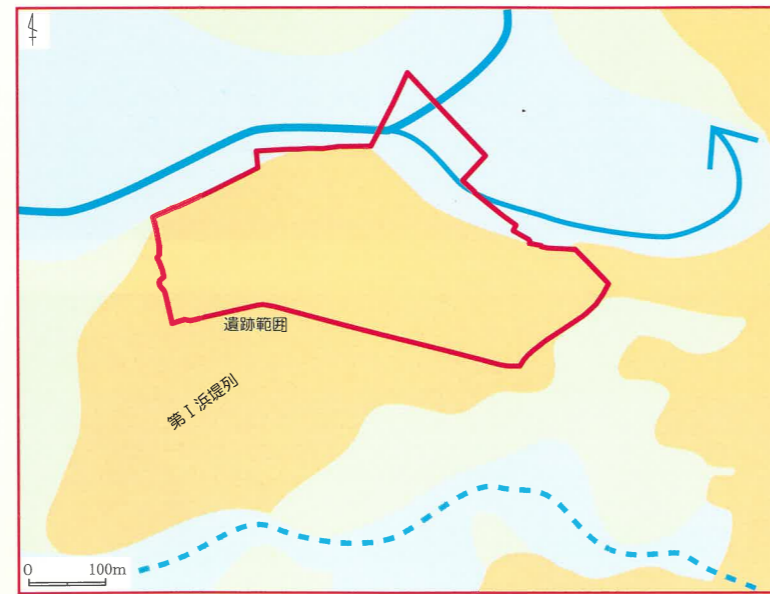
低湿地（後背湿地：浜堤列や自然堤防などの後ろにある湿地。主に粘土・泥からなる。）

遺跡の中心となる古墳時代前期～平安時代初頭（4世紀～9世紀前半）の調査では、自然地形を活かした集落の形成が確認されました。そこでは、微高地に居住域・墓域・畑域、低湿地に水田域が営まれていることが知られ、土地利用と食糧生産の実態を考える上で貴重な成果がもたらされています。



沼向遺跡と浜堤列（第Ⅰ～第Ⅲ浜堤列）

西暦	時代	沼向遺跡の居住と集落の形成	仙台平野の遺跡	日本列島の遺跡	
縄文時代	旧石器		山田上ノ台遺跡 富沢遺跡	岩宿遺跡 国府遺跡	
	草創期		野川遺跡		
	早期		北前遺跡		
	前期		三神峯遺跡	三内丸山遺跡	
	中期		山田上ノ台遺跡	加曾貝塚	
	後期		大野田遺跡		
	晩期	● 縄文時代後期～弥生時代	土地利用が始まる 土器製塩が行なわれる	赤生津遺跡	居徳遺跡
	前期	●	土器製塩が行なわれる	富沢遺跡	板付遺跡 唐古・鍵遺跡 垂柳遺跡 吉野ヶ里遺跡 登呂遺跡
	中期	●		中在家南遺跡	
	後期	●		八木山緑町遺跡	
弥生時代	前期	● 古墳時代前期	集落が形成される 居住域、墓域（古墳群）	藤田新田遺跡 遠見塚古墳	箸墓古墳
	中期	●		南小泉遺跡 大野田古墳群	仁徳天皇陵
	後期	● 古墳時代後期① ● 古墳時代後期②	集落が形成される 居住域、畑域、水田域 居住域、畑域、水田域	法領塚古墳 栗遺跡 郡山遺跡	藤ノ木古墳 石舞台古墳 藤原京跡 大宰府跡
	奈良	● 奈良・平安時代初頭	居住域、畑域、水田域	多賀城跡・多賀城廃寺跡 市川橋遺跡 山王遺跡	平城京跡 倉百跡 平安京跡
	平安	●	居住の痕跡がなくなる	王ノ塚遺跡	草戸千軒遺跡
	鎌倉			今泉城跡	
	南北朝			洞ノ口遺跡	一乗谷朝倉遺跡
	室町			仙台城跡	安土城跡
	戦国				
	江戸	● 江戸時代	集落が形成される 居住域、畑域、水田域	養種園遺跡 松木遺跡	



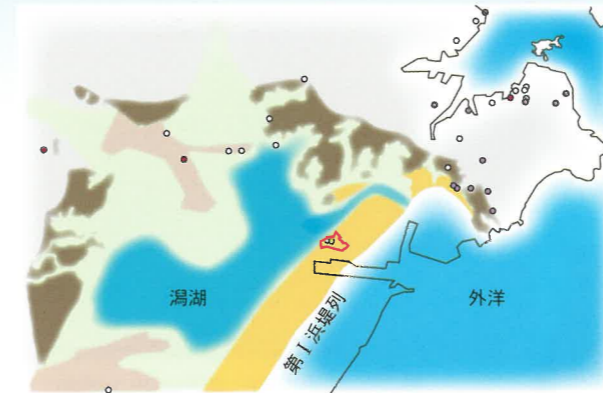
※昭和22年米軍撮影の航空写真をもとに、松本秀明氏（東北学院大学地域構想学科）の指導を受けて作図

沼向遺跡周辺の微地形分類図

縄文時代後期～弥生時代

(3500年～1700年前頃)

縄文時代後期の中頃から沼向遺跡に人の活動の痕跡が認められるようになります。縄文時代晩期の後葉には、墓（土墳墓）が作られていました。



縄文時代の微地形環境想定図と遺跡分布

潟湖は、5000～4500年前に形成された第Ⅰ浜堤列の北側で海とつながっていました。沼向遺跡は第Ⅰ浜堤列の上に立地しています。

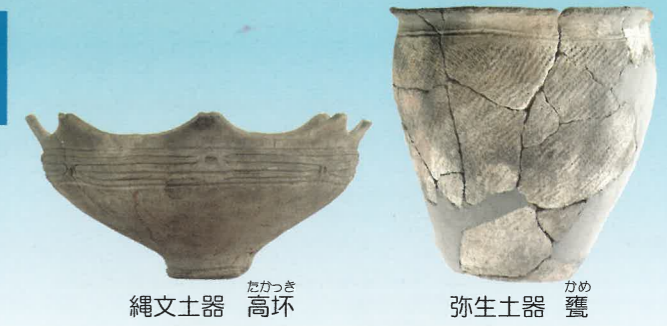


出土した縄文土器



弥生時代の微地形環境想定図と遺跡分布

第Ⅱ浜堤列が形成されます。潟湖の面積はさほど変わらず、低地に広く展開しています。

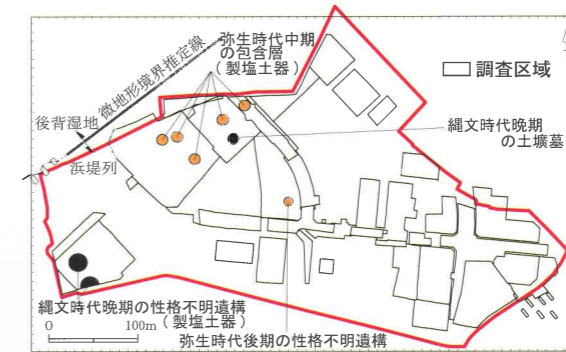


縄文土器 高坏

弥生土器 甕



縄文時代晩期後葉の土墳墓が確認された状況。表紙に示したように、土器が逆さで出土しました。



縄文時代・弥生時代の土地利用

遺跡の西側には、潟湖が広がっており、縄文時代晩期の中頃と弥生時代中期の前葉には土器製塩が行われていました。



出土した弥生土器



縄文時代から江戸時代にかけての微地形環境変遷想定図は、松本秀明氏の指導と助言を得て作成しました。

※潟湖：浅い海の一部が、砂洲などによって外洋と区別され、浅い湖沼となったもの。潮口で外洋とつながる。

古墳時代前期

(4世紀)

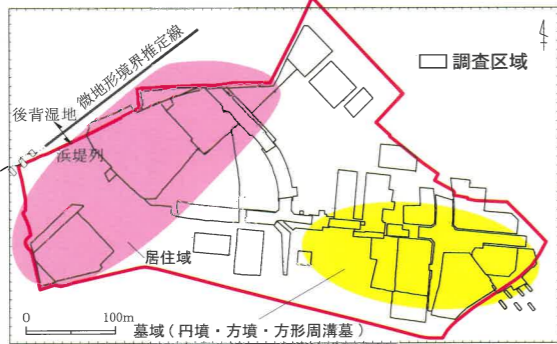
集落が形成されます。遺跡の北西部で住居域、東部で墓域（古墳・方形周溝墓群）が見つかりました。



小型丸底鉢
鉢
小型丸底鉢
鉢
つぼ壺
有孔鉢
かめ甕



5号墳埋葬施設出土ガラス製小玉

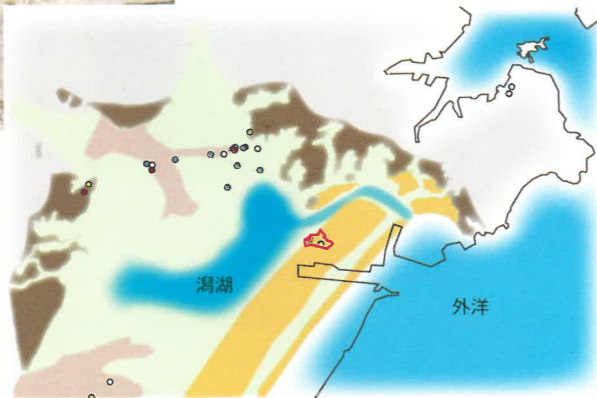


古墳時代前期の土地利用



古墳群遠景
左から4号方形周溝墓、4号墳、5号墳

古墳時代前期には漁撈活動が行なわれていました。古墳時代中期になると居住域や墓域はなくなり、人の活動は、少なくなります。



古墳時代前期の微地形環境想定図と遺跡分布
瀧湖の面積は、縄文・弥生時代より縮小し、北岸には広大な水田跡が形成されました。



住居 (SI1007) で3個まとまって見つかった土師器 器台



竪穴住居 (SI926) 床面と出土遺物



住居からまとまって出土した土錘。管状と球状があり、網のおもりに使われました。



古墳時代前期・後期の竪穴住居跡・竪穴遺構、古墳前期の古墳群

古墳時代後期①

(6世紀末～7世紀前半)

再び集落が形成されます。遺跡の北西部で居住域と生産域(畑域)、北東部で生産域(水田域)が見つかりました。



竪穴住居 (SI807) 写真の奥中央に見えるのがカマドです。



住居などから出土した須恵器 (窯で焼いた土器)



竪穴住居 (SI807) のカマドと床面から見つかった土師器



出土した須恵器の大甕 (高さ56.2cm)

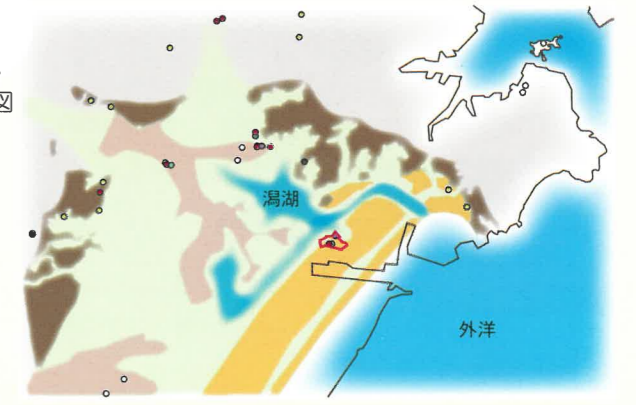


古墳時代後期①の土地利用



農工具 (反柄) 出土状況
古墳時代後期では、居住域…竪穴住居26軒、竪穴遺構6軒が見つかりました。

周辺の丘陵では、横穴式石室をもった古墳や横穴墓(崖などに穴を掘ってつくった墓)がつけられるようになり、須恵器の生産も始まります。沼向遺跡では、水田稲作やモモなどの果樹の生育を含め、農耕活動が行なわれました。

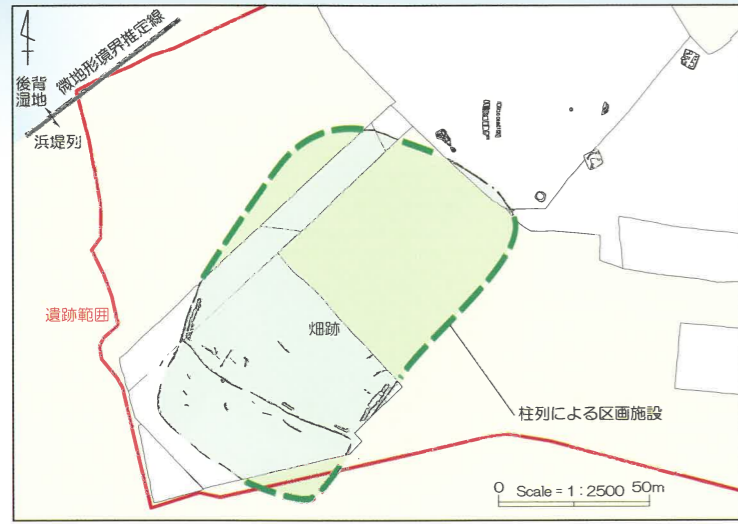


古墳時代後期の微地形環境想定図と遺跡分布
瀧湖の面積は、古墳時代前期・中期よりやや縮小します。湖面の水位は上昇傾向にあります。

古墳時代後期②

(7世紀中頃～8世紀初頭)

居住域であった遺跡西部に、柱列で大きく区画された生産域(畑域)が作られます。区画の長軸方向は、浜堤列と後背湿地の境界方向に沿っています。



柱列による区画施設



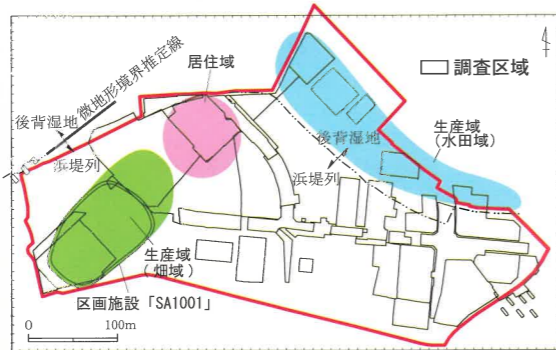
ロクロを使わないで作った土師器甕が住居などで見つかりました。



畑域を区画した柱列跡。直径約30cmの柱穴が並んでいます。柱の直径は15cmほどでした。



畑域に設けられた井戸跡



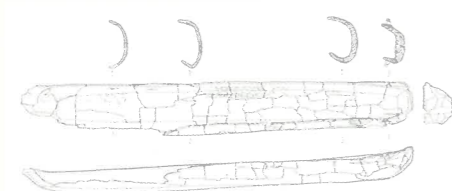
古墳時代後期②の土地利用



井戸跡をたち割った状況



もともと舟材であったものを切って、半円形の舟材2つを組み合わせ、円形の井戸枠にしていた。



多賀城市市川橋遺跡の河川跡で見つかった同じ頃の丸木舟 全長5.13m、幅0.65m



まわりに溝をめぐる建物跡。

集落は、西部に生産(畑域)、北西部に居住域、東部に生産域(水田域)があります。そして遺跡の西方には潟湖が広がる地形環境が続いており、生産域(漁撈域)での活動や交通手段に、丸木舟が活躍していました。集落の中心である居住域は、古墳時代前期・後期には、浜堤列の縁辺部にあることがわかりました。

奈良時代～平安時代初頭

(8世紀前半～9世紀前半)

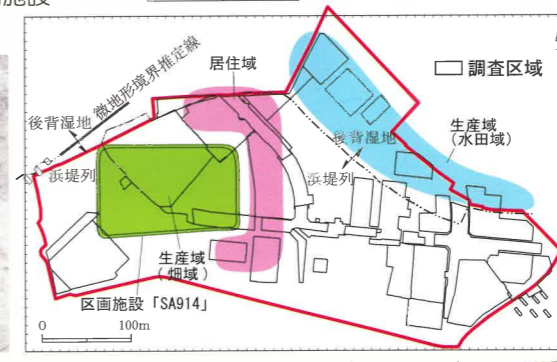
集落が継続して営まれました。住居・建物や畑の区画の方向が東西南北を基準とするようになりました。9世紀の中頃には、地下水位の上昇により集落はいったん途絶えました。



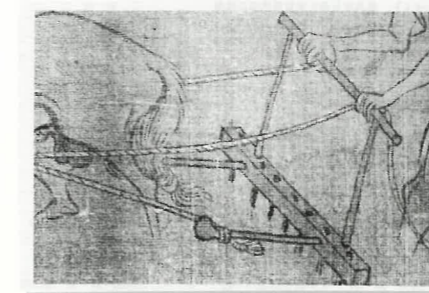
溝による区画施設



水田跡で見つかった農工具(馬鍬の台木)



奈良時代後半～平安時代初頭の土地利用



左の図は、鎌倉時代の絵図(聖衆来迎図「六道図」)で、馬鍬を使っている様子が描かれています。把手を人がもち、馬や牛に引かせて、泥を細かく砕いていきいます。この時代は、馬鍬の歯は鉄製ですが、奈良・平安時代は木製でした。



ロクロを使って作った土師器甕が平安時代の住居(SI935)から見つかりました。



竪穴状の遺構が3基ノレン状に連なった特殊な遺構。畑域のなかで見つかったので、農耕に関わる性格が考えられます。類例はありません。明確な柱穴は見つかりませんが、何らかの建物が存在していたと思われます。居住域は、浜堤列の縁辺部からやや離れ、区画施設の北東～東側となります。



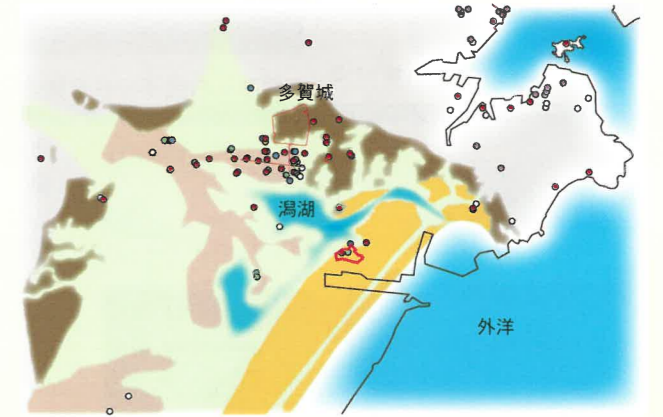
畑跡の耕作痕の中から須恵器がかさなって見つかった状況



底部に墨書のあるロクロ土師器と須恵器



奈良時代の微地形環境想定図と遺跡分布 潟湖の水位は上昇傾向にあります。この時期、北方の丘陵に多賀城が造られました。



平安時代初頭の微地形環境想定図と遺跡分布 潟湖の水位の上昇傾向が続き、沼向遺跡では、集落の維持がむずかしくなってきます。